

消えていく江戸の堀の面影

リバーフロント研究所 理事 土屋信行

1. 三原橋地下街

今年（平成25年）3月、また一つ江戸時代の記憶が消えた。三原橋の地下街である。実は三原橋という名前にふさわしい川と橋は、今は無い。その場所に行ってみると、橋も川も無いので通り過ぎてしまう。しかし、これまではここに川があったことを、三原橋地下街が後世に伝え続けてきたのだった。今年、その地下街が東京から消えるのである。



消えることになった三原橋地下街

三原橋という橋は、慶長17年（1612年）江戸前島東縁に掘削された三十間堀に架けられていた。三十間堀は徳川家康が江戸を開府した当時の海岸線で、海面からわずかに高くなっていた江戸前島と言われた場所の東側の海岸線である。この更に東側に、土を埋め立てて新たな土地を広げていく。この埋立地が木挽町である。ここが時代を下ると今の銀座地域に組み込まれ、銀座東地域一帯となっている。

この三十間堀は江戸が発展していく上で様々な物資の輸送拠点として数多くの河岸が整えられ大変賑わっていたということである。

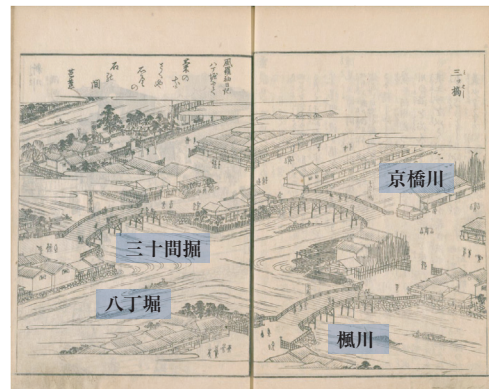


築地八町堀日本橋南絵図（国会図書館Webサイト）

三十間堀は楓川（もみじがわ）、京橋川（きょうば

しがわ）、八丁堀川（桜川）（はっちょうぼりがわ、さくらがわ）が合流する辻のような地点から分流し、堀の起点となっていた。

三つの堀の合流地点の楓川には弾正橋、京橋川には白魚橋（牛草橋）、そして三十間堀川には真福寺橋という三つの橋が堀の辻を取り囲むように架けられていた。その風景は江戸名所図会に「三ッ橋」として描かれている。



江戸名所図会、三ッ橋（国会図書館Webサイト）

三十間堀はこの地点から分流後、現在の京橋プラザのところで西から南へとクランク状に流れを変え、ウインズの西側を流れ銀座八丁目新橋の汐留橋のところでお濠に合流し汐留川に継っていた。汐留川は江戸城の外濠として造られ、後にその河口部の海を埋め立てて浜御殿（現在の浜離宮恩賜庭園）が建設されると、それを取り囲むように濠が延長される。このうち浜御殿の西縁にあたる水路を指して汐留川と呼んでいたものである。

この三十間堀に架けられていた橋には真福寺橋（しんぶくじばし）の他に、紀伊国橋（きのくにばし）、三原橋（みはらばし）、木挽橋（こびきばし）がある。お堀に合流していたところが汐留橋で明治時代に蓬莱橋と名前を変え、今では堀も橋も無くなったが、交差点の名前だけが残っている。

この三十間堀に江戸の舟運の一大集積地として、東側には大富町河岸、蜷（あさり）河岸、松村町河岸、東豊玉河岸（豊玉、木挽）があり、西側には白魚河岸、西豊玉河岸が並んでいた。

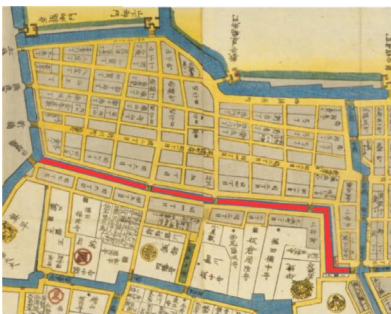
2. 三十間堀と銀座

銀座の地名の由来は、関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康が日本国内の経済的な実権を掌握することを

目指し、慶長6年5月（1601年）京都伏見の伏見城下に貨幣鑄造所を設立し、堺の両替商湯浅作兵衛らに命じて取り仕切らせ、これを伏見銀座と呼んだことから始まる。湯浅作兵衛は徳川家より大黒常是（だいこくじょうぜ）という姓名を与えられ、これ以降、大黒常是家は鑄造された銀貨に「常是」の略号を刻印して銀貨の極印・包装を担当した。このため、銀座で出された銀貨の包みを常是包と呼んだ。これらの役方を取り仕切る者たちを銀座人と呼び、銀座人たちは町屋敷四町を拝領して両替町と称し、銀座会所と銀座人の家宅と常是吹所が建てられた。この両替町という名称は諸国の銀山より産出される灰吹銀を買い入れ、公鑄の丁銀と引き換えることでこう呼ばれた。銀座人は一種の両替商でもあった。

慶長11年（1606年）に徳川家康によって駿府城に銀貨鑄造所（銀座）が設置された。ここでも両替町の名の通り、銀座の業務として灰吹銀の公鑄銀への取り換えが行われた。そこで銀貨鑄造所の周辺には両替商が集積した。さらに慶長13年（1608年）に伏見銀座は京両替へ、続いて駿河銀座は慶長17年（1612年）に江戸通町京橋より南へ、四町の広さを拝領して移った。既に江戸銀座が両替町と呼ばれていたことから、この地を新両替町（銀座）と称し銀座を本両替町と称するようになった。

三十間堀と豊玉河岸はこの銀座を支える舟運の要として発展していったのである。



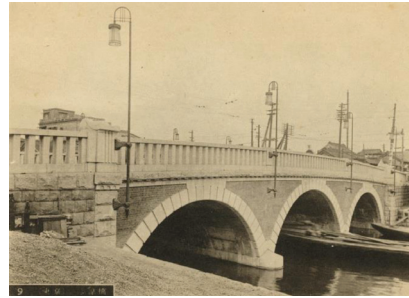
築地八町堀日本橋南絵図に三十間堀を朱色で表示

三原橋の位置は、銀座四丁目交差点と昭和通りの中間くらいである。両側に店はあるが、半円状の脇道を裏へ回ると晴海通りの地下に映画館があって、橋桁下の感じが漂っている。



三原橋地下街にあった映画館

新橋堀と京橋堀を結ぶ三十間幅（55m）長さ六百三間（1,097m）の運河は、昭和23年から埋め立てられ、昭和通りに三原橋だけが残った。その橋桁をそのまま使いその桁下に三原橋地下街が造られたのである。



大正8年に架設された三原橋（京橋図書館蔵）



埋められる直前の三原橋（京橋図書館蔵）

3. 埋め立てられた堀

今の東京に水の都市というにふさわしい堀や川はない。江戸時代の大絵図を見ると堀や川が網の目のように張り巡らされているたことが分る。この風景はなぜ失われてしまったのだろうか。

戦後十三年にわたって都知事をつとめた安井誠一郎に、「東京私記」（昭和三十五年）という随想集がある。知事をやめた直後に出た本だが、「堀を埋める」という1章があって、そのいきさつが書かれている。「焼跡四千八百万坪には片づけねばならない瓦礫が推定八十万立方坪、五トン積みのトラックで十六万台分にあたる量で、ちょっと運んで捨ててくるというわけにはいかなかった。アメリカ軍政部からは、軍事と衛生の面から『あれを早く片づけてしまえ。なにをとするか。』と火のつくような督促と叱咤が浴びせられた。海に持って行って埋立てに使うしかないが、そんな大事業を行う金は無いらしく、トラックの入手も不可能に近かった。」また「震災復興にならわす」という1章を設け「国内事情が両者（関東大震災と太平洋戦争）は全く正反対だった。税を収めてくれる事業体はほとんど壊滅状態のところへもってきて、『食糧をよこせ』という人ばかり増えているのだ。机の上でどんなみごとな復興計画の作文を試みたところで、手の施せるような現実では無かったのである。そこで私は、この際一番戒めなければな

らないのは、間違っても震災復興の方式にならうな、ということだと考えた。大風呂敷と言われた震災復興計画でさえ、あまりに急速度の東京の膨張に取り残されて、たちまちハンカチ級になったのを直接経験している連中だから、今度こそその轍を踏まないぞとばかり、遠大雄渾なプランを練り上げて持ってくるのだ。だが、私は目をつぶって、それらを全て押さえてしまった。

『何はともあれ、今は一人の都民も死なさぬ事だ。なんと言われても構わないから、これ以上の無理を都民に強いる施策は後へ回そうじゃないか』と部内を説いて、あまり見栄えのせぬ復旧に精を出してもらった。大きな建設計画を全て棚上げしても、住宅、道路、学校の復旧をはじめのつびきならぬ仕事が目白押しにいらんでいる。だから私ははじめのうち、どこへも重点を置かないで、ケチくさい予算をまんべんなく割り振る方針をとった。果たせるかな、これには悪評が集中した。だが、私には『この無策こそが一番の大策なのだ』という確信があったので、どんな世評も聞き流すことができた。名古屋は市の中心部が綺麗に焼き払われていたから、新しい青写真を引くのに思い切ったことができた。東京は米軍が中央のビル街を残したので、その規格以上の計画は望んでも不可能だった。』

そのとき、安井知事は石川栄耀（後の建設局長）に費用を一切掛けない解決策を命じた。そこでひとつの案が出された。「震災地区、ことに下町の不要河川の埋め立てに利用すれば、少ない費用と時間で問題はいっぺんに解決できる。そのうえ埋立地を売れば、それを財源に自前でカタをつけてゆける」というものであった。安井誠一郎知事は記している。「助かったという気持ちで一杯になり、石川君の手を押し頂く思いで堅く握りしめたものだった。」



埋め立てられる前の三十間堀（手前の橋が三原橋、見えている橋は手前から木挽橋、賑橋、出雲橋）（京橋図書館蔵）

その結果「不用河川埋立事業計画」という、江戸の面影が消し去られていくことになる、「東京の堀川埋め立て工事」が開始された。昭和22年10月、今も地名として残る数寄屋橋、鍛冶橋、呉服橋が架かっていた東京駅八重洲口前の外濠の埋め立てが開始さ

れた。こうして三十間堀は昭和23年から埋め立てられ、この年には三十間堀川に加え、東掘留川、龍閑川、新川が、翌年には四谷駅そばの真田堀、鍛冶橋下流の外濠、六間堀川、浜町川と、昭和25年末までに皆埋め立てられ、出来上がった造成地は売却されてしまった。

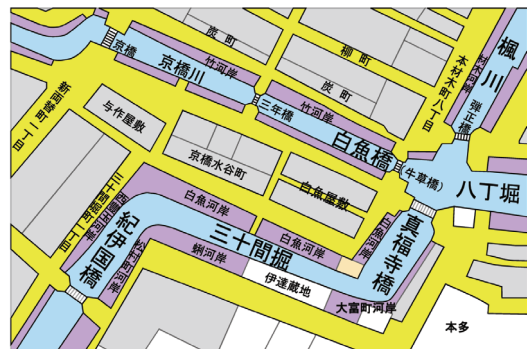


埋め立てられる三十間堀（手前の橋が三原橋、見えている橋は手前から木挽橋、賑橋、出雲橋）（京橋図書館蔵）

これを安井誠一郎は「あとの八千立方坪の残土も二十六年にはきれいに始末がついて、ようやく東京の街から戦災のカサブタが消え、本来の面目をとりもどしたかっこうになった。この間埋立て工事と金属回収などで、延べ数十万の人々が仕事にありつけた勘定である。以上がことのあらましか、あの事態に処する方策として、あれ以上の名案は、今日においても私には思いつけない。」と書いている。

4. 整備され続けた東京の堀

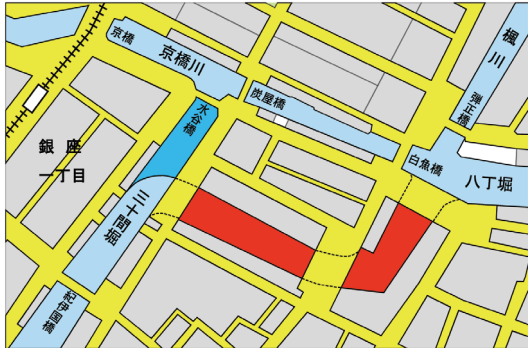
この「不用河川埋立事業計画」からは東京の河川はいかにも何の役にも立たない不用なものという印象を受けるが、果たしてそうだったのだろうか、今一度江戸時代の三十間堀を注目してみよう。当初の三十間堀りは三ツ橋のところでクランク状になっている形から船の荷役には使いづらかった。



クランク形状の三十間堀

そのため明治5年に起こった銀座の大火の後計画された都市改造計画の「銀座煉瓦街計画」では真福寺橋のかかる部分を埋め三十間堀を直線的に京橋川に繋げるように計画された。しかし計画は縮小されて、その時は実現しなかった。

しかしその後の舟運の発展から、クランク状の堀ではいかにも舟の運行上のネックとなることから明治39年（1906）の改修工事の時によく三十間堀を直線的に京橋川に繋げる開削が実現した。この時ここに水谷橋が架けられたが、その後三十間堀の埋め立てに合わせて今の水谷橋公園として整備されている。堀は改修され使い続かれてきたのである。



直線的に改修された三十間堀

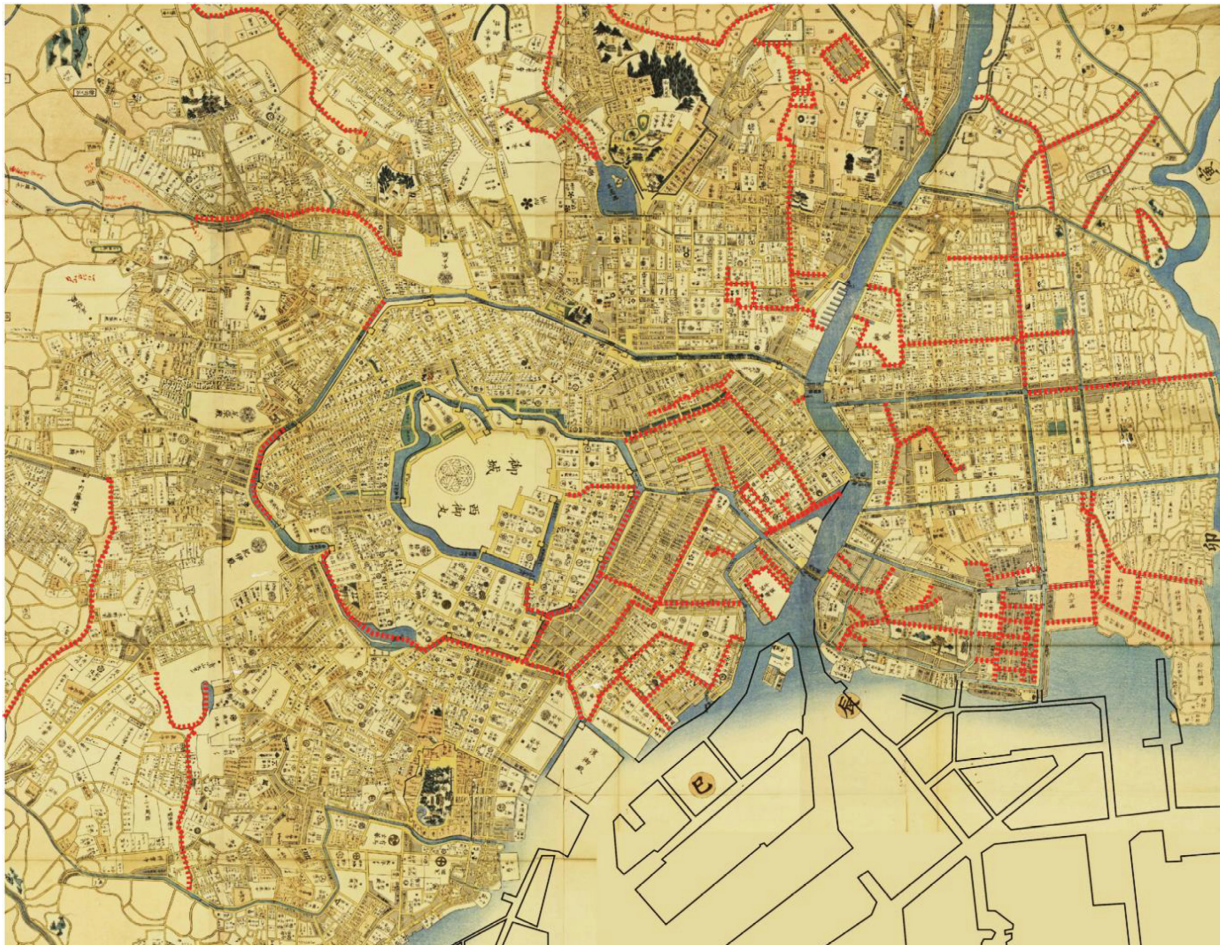
5. 地下街はどうして出来たのか

戦後、戦災者、引揚者、復員者が少ない資金で営業できるため、露店商の数は14,000軒に達していた。1948年8月GHQは交通安全、衛生環境、都市美観上からすみやかに露店を撤去するよう都知事、警視総

監に指示した。安井誠一郎はここでもまた建設局長石川耀に、「将来の都市計画と関連する事柄である」として「泣く人を出さない、都民の税金は使わない」という解決策の立案を命じた。そこで露店整理の方針は、①転廃業者に対する国民金融公庫からの資金融資、②集団移転、希望者に対する代替地の斡旋と店舗建設資金の融資を斡旋するという事になった。こうして23区の公道上の露店は、1952年12月を期限にすべて撤去された。

集団移転先には鉄筋コンクリート造りのマーケットがつくられた。上野では広小路の露店の収容先として、西郷さんの銅像の下が候補地となった。そして出来上がったのが今の映画館などが入居しているビルである。安井誠一郎はこの時も「石川君の奇想天外の思いつき」と賞賛しているが、帝都復興事業で完成した上野の山の美しい石積と緑の斜面地が消えることとなった。このようなマーケットは都内各地につくられ新宿、池袋、有楽町、新橋、浜松町、銀座、京橋、などがある。東急渋谷地下街もこの時に整備され、今では東京の名所ともなっている。

そして三原橋地下街もこうして、埋められた三十間堀と晴海通りの交差点の地下に作られたのであった。



消えた江戸の水路、天保14年江戸大絵図（早稲田大学図書館）に消えた水路を朱色点線で表示